

女性の本と  
女性の為の  
情報をお知  
らせする  
ウイメンズ  
ブック  
友の会会報

# ウイメンズ ブックス 第14号

1985年  
3月20日発行

Women's Books

(年会費 1,500円)

ウイメンズ ブックストア

602 京都市上京区下立売通西洞院西入る

電話 075-441-6905

発行所 有限会社 松 香 堂 書 店

振替貯金口座 京都8-7950

## ウイメンズ ブック 目録 (14)

このリストの書籍を御希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申込み下さい。書籍代は送料共でお振込み下さいませようお願致します。

ご注文の本の定価の合計額に、右の表の送料を合せてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

1,000円以下の場合	300円
1,001円～3,000円の場合	400円
3,001円～5,000円の場合	500円
5,001円～10,000円の場合	600円
10,001円以上の場合	700円

(各項末尾の番号はウイメンズブックストアの書籍整理番号です)

### 子 育 て (2000～2234) 50音順

#### 【あ・い・う】

「ああ子育て戦争——小説親子事情」 矢崎 藍  
学陽書房 1980年 1200円  
親の視点から現代の教育問題を小説風に描いた12話。迷い、悩む親の姿が生き生き伝わってくる。 [2009]

「愛着と自立——親と子のあいだ」 小林 登・河合雅雄  
小此木啓吾 金子書房 1983年 1200円  
“愛着と自立”のセミナーの記録。愛着のなりたち、愛着と自立の系譜、自立を育てる教育など母子のかかわりの問題を指摘する。 [2217]

「新しい子育ての知恵をさぐる」 山住正己 岩波書店  
1984年12月 950円

日本人の子育ての歴史を近世よりたどる。自然の助けによる温和な子育て(近世)、日本の近代化と子育て、今後の展望、一人一人の可能性を大切に。 [2234]

「新しい母の本——子育てに手遅れはない」 北島道之  
朝日新聞社 1980年 1700円  
人並みにと願う心の光と影、早く大きくと祈る心の幸と不幸、手がかからない子の危険な実力、いつもよい子の本心(目次より) [2199]

「遊んで育てる」 バーバラ・J・テラー BOC 出版  
あごら翻訳グループ訳 1981年 1200円

アメリカの女性心理学者の本。幼児教育の専門家として、子育ての経験を踏まえて、子どもの能力を伸ばすため、子どもと体を動かし遊ぶことを提唱。翻訳は“あごら”で学んだ主婦たち7名があたる。 [2053]

「危ない母親」 小田 晋 ごま書房 1981年 680円  
女性の社会的進出自体を否定する気はないがと前向きをしながらも、女性が自立し、翔ぶために子どもを犠牲にしてしまうのならば、はじめから結婚をしない、あるいは子どもをつくらない選択も可能はずだという。著者の描く子どもの心を蝕み、夫を無気力にする危ない母親の正体とは?資料として一読をおすすめする。 [2024]

「あせらないでお母さん」 益田総子 大月書店 1984年  
1100円  
12号 最新刊案内をご参照下さい。 [2177]

「家出の心理——親子関係をつくり直すチャンス」  
市岡典三・柴田省三他 有斐閣 1982年 580円  
今日の子どもの家出の特質と実態、親子関係のあり方を追求。 [2222]

「生きる力を伸ばす子育て」 武田京子 汐文社  
1984年9月 1200円  
子育てとは生きる力づくりであり、親もまた子育てをしながら自分の生きる力に磨きをかけていけばいいのだと悟り、目のウロコが落ちたと著者はいう。トータルな人間づくり、自立と共生のできる子育てを提唱。かつて主婦論争を展開した著者の子育て論。 [2185]

「疑わしき母性愛——子どもの性格形成と母子関係」  
ヴァン・デン・ベルク 足立叔・田中一彦訳 川島書店  
1977年 1300円  
オランダの著名な精神医学者の母子関係論。幼時における母性的配慮の欠如よりも過保護の方を問題にすべきだと警告する。育児は何よりも自然だと思える仕方が大切であると指摘する。 [2091]

## 【お】

「追いつめられた子どもたち」 C・ロシュフォール  
西川祐子訳 人文書院 1978年 1500円  
母性と有色人種は抗議の大声をあげたので、ようやく抑圧に苦しむ身分にいたると認められた。しかし子どもたちは未だに忘れられている。また著者は生産向上を至上目的にかかげて環境破壊、資源の枯渇をまねいたのと同じ巨大な力がいま開発できる最後の資源として子どもに目をつけていると危機的社会的状況を告発。 [2192]

「欧米の母親に学ぶ女の子の育て方」 南 和子  
鎌倉書房 1982年 950円  
二人の娘を持つ著者が、三年間のカナダ生活と帰国後も大勢の欧米の母親に接し学んだ家庭、自立した女性の育て方を語る。仕事をもち二人の娘を育てている著者の体験的子育て論。 [2139]

「おかあさん、ごはんと本とどっちがすき」 正置友子  
創元社 1982年 1500円  
千里ニュータウンの団地新聞に地元の主婦が連載した絵本の紹介エッセイ。絵本を子どもとひととく手がかりになる。 [2224]

「お母さんの人間宣言——育児ストレスに負けない」  
シャーリー・L・ラドル 堀江瑠璃子訳 三笠書房  
1981年 980円  
著者はアメリカで活躍中の育児ライター。日本の母親たちとほとんど変わらない状況で育児ストレスに耐え、周囲を説得し、社会に挑戦して、人間らしい自分らしい生き方を見つけるために努力している女性たちを描く。気にしすぎる他人の目、非現実的な母親批判、子供は親の所有物ではないなど。 [2195]

「お父さんの娘の育て方」 広瀬仁紀 主婦と生活社  
1979年 780円  
父親の書いた娘・子育ての本。しつけと自立心を身につけさせることに重点をおく。 [2131]

「親業（おやぎょう）——新しい親子関係の創造」  
トーマス・ゴードン 近藤千恵訳 サイマル出版会  
1980年(新版) 1300円  
本書は子供が育つ上で親がいかに関わるか、親の側に焦点を当てて子育ての見直しをする。PET (Parent Effectiveness Training) メソッドは一人の人間を生み、養い社会的に一人前になるまで育てる仕事であり、それには能力と努力がいるという。 [2105]

「親子って何だろう——なだいなだの親子観」  
なだいなだ 主婦と生活社 1979年 880円  
精神科医であり、作家でもある著者がユニークな視点で、親子の在り方を考える。 [2191]

「親だけが出来る教育」 俵 萌子 学習研究社  
1984年4月 980円  
ユニークな家庭教育をしている11軒の家庭を取材。 [2198]

「親子関係の心理」 柏木恵子 宮本美沙子他 有斐閣  
1978年 580円  
子どもの成長にとって親子関係とは何か。乳児期から児童期までの発達段階ごとに子どもの人格形成に及ぼす親子関係の諸相を説き明かす。 [2112]

「親と子」 東京大学出版会 1973年 1500円  
東京大学公開講座17 文化による親子関係の相違 中根千枝、現代日本の親子関係、民法における親子、親子と住居など。 [2042]

「親と子の絆——学際的アプローチ」 河合隼雄・小林登・中根千枝編 創元社 1984年 1500円  
内外の専門家が社会人類学、行動学、生物・医学、心理学の立場から親と子の心の絆とは何かを考えるシンポジウムの記録。 [2168]

「親と子の病理」 荘厳舜哉 ナカニシヤ出版  
1984年3月 1700円  
現代家族の病理現象を症例をあげながら考える。登校拒否、神経性食欲不振症、非行など。 [2208]

「親と子の感動ある子育て学」 佐野 豪 青年書館  
1983年 980円  
子育ての実践ノート。親だけがしてやれるふれあい教育。 [2031]

「女の子の育て方」 樋口恵子 文化出版局 800円  
男女差別は誕生と同時に始まっている。男の子の育て方にもふれながら、女の子からテン足を脱がせる教育を考える。本書の英訳「Bringing up girls」松香堂刊 富井明子訳最近刊。 [2055]

「女の子の伸ばし方——のびやかな子に育つために」  
吉武輝子 学習研究社 1980年 850円  
従来の女の子のワクに閉じ込めない、女という性を誇れる子育ての知恵。 [2010]

「女の子はつくられる」 佐藤洋子 白石書房  
1977年 980円  
女性問題の視点から教育現場に切りこみ、新しい女子教育のあり方を模索したレポート。教科書の中の性差別、進路指導、受験と共学、野球と女生徒、小学校、幼稚園こうして女の子はつくられる、絵本の中の男と女など。ウィメンズブックスストアのベストセラー。 [2027]

## 【か・き】

「母さん泳ぎに行っている」 秋山さと子 青土社  
1984年9月 1400円  
ユング派心理学の立場から子どもの深層心理を照らします。子どものファンタジーについて、少女の性と愛、子どもたちのウソ、お化けと子どもなど。 [2205]

「家事、育児を分担する男たち」  
福岡・女性と職業研究会編 現代書館  
1982年 1400円  
家事、育児を日常的にかなり多く分担している夫たち33名にアンケート調査と面接を行い、アメリカ、イギリスの夫の事例を紹介し、これからの家事、育児のあり方を考える。 [1630]

「<家族>ってなんだろう」 ますのきよし 現代書館  
1981年 1500円  
「現代子育て考シリーズ全5巻」の編集委員である著者の家族論と子育て論。男も女も育児時間をという男性側からの子育て論はユニークで、新しい男女のあり方を示唆する。一読をおすすめする。 [1638]

## 「家庭科、男子にも、」

家庭科の男女共修をすすめる会編 ドメス出版  
1982年 1500円

いまの家庭科教育をあらゆる角度からとらえる。〔1635〕

## 「家庭の教育 Q&amp;A——かしこい子どもに育て、非行に

走らせない」君和田和一著 三和書房 1983年 350円  
小・中学生の実生活に即した子育てのポイントを紹介。  
母親が何もかも教えるのではなく、考える子どもを育て  
るのが必要という。バイク、万引き、タバコの指導方法、  
子どものほめ方、叱り方。〔2193〕

## 「管理される子どもたち——ルポ・しのびよる右翼教師の

群れ」林雅行 柘植書房 1982年 1800円  
いま教室から軍靴の音が聞こえてくるというおそるべき  
ルポ。千葉県松戸市、愛知県の例、日教連をはげます学  
者・文化人、子どもを狙う自衛隊の民事作戦。〔2081〕

## 「危機の少女たち——密着取材、中・高生の売春」

石原勉 東京新聞出版局 1975年 980円  
からだを商品化することに大きな抵抗感がない。このこ  
とは性の乱れよりも、人間性に関わる問題だという意識  
から、中・高生の売春の実態を取材する。学校でもマ  
ークされていない、表と裏の顔をもつ少女たち。〔2084〕

## 「教育されてたまるかい」ろくさん ばいほ出版刊

1975年 880円  
初期の六三制義務教育で育った男女8人が神戸弁まる出  
しの会話でしゃべり合う現代教育批評。プロイラー飼育  
場になった学校、エリート教育と指導者社会。管理と飼  
育を進める現代の教育を徹底的に批判し、特に会話の妙  
味のある本。〔2052〕

## 【け】

## 「現代子育て考 その1」現代子育て考編集委員会編

現代書館 1975年 980円  
女も男も子どもも差別や分業の被害者にも加害者にもな  
ることを拒否して、共に生きあえる関係に近づくことを  
共通の想いとして編集された現代子育て考シリーズ。本  
書では子の成長と大人の生き方、子育てと婦人労働者の  
実態、模索する共同保育他。〔2015〕

## 「現代子育て考 そのⅡ——女・男・子どもの関係性を

問い直す。」1976年 980円  
私の子育て考 武田京子、増野 潔。保育行政を撃つ  
育児社会化論は女を解放するか？座談会・男にとって子  
育てとは。〔2016〕

## 「現代子育て考 そのⅢ——労働・子育て・人間解放」

1977年 980円  
施設・内と外から、共同保育レポート、子育てをめぐる  
男と女。〔2017〕

## 「現代子育て考 そのⅣ——男と子育て」

男の子育てを考える会編 1978年 980円  
仕事、生産活動に馬車馬のように駆り立てられ、すっぱ  
り抜けた生命生産＝子育ての領域に踏み込むことによっ  
て、人間らしさを取りもどしたいという編集委員会。一  
見理解ある顔を捨て、子育ての領域に踏み込んだ男たち  
は訴える。〔2018〕

## 「現代子育て考 そのⅤ——保育を問う」

保育労働者交流会編 1980年 1200円  
社会的労働形態として母性を強調される保母という名に  
警戒心を持ち、保母を避け、保育労働者として独自の主  
張、活動をつづけているグループの編集による本。保育  
労働者と女の自立をテーマに考える。〔2019〕

## 「現代の子どもの人権」一番ヶ瀬康子 ドメス出版

1981年 1300円  
子どもの人権保障と国際児童年について。子どもの人権  
と子どもの現実、日本とスウェーデンを比較して、これ  
からの幼児教育、家庭のしつけと集団保育(目次より)  
〔2200〕

## 「現代母親論」藤井治枝 明治図書 1975年 1300円

母親にとって子どもはどのような存在か。現代の母親は  
子どもにどんな役割を期待しているのか。明治から終戦  
までの母親像のうつりかわりを追いながら、現代の母親  
像を考える。〔2074〕

## 【こ】

## 「子育てのいのちの学校」鈴木久子

ノームニコミセンター 1980年 1400円  
3人の子を産み育てた若い母親の体験記録。子どもの小  
さい頃、夫の手助けがうれしかった。妻だから、母だか  
らと一人で押しつけられた思いに陥るときほど、夫に不  
信を抱いてしまうことはない。また自分でわが子の育て  
方の道をさがすことの大切さを語る。〔2048〕

## 「子育て10年子別れ10年」俵 萌子 あずさ書房

1981年 1200円  
著者の子どもが、8才と5才であった頃より雑誌のコ  
ラム欄に12年間書きつづった“こどもの周辺”。子育ての後  
半は、いかにして、きれいに、こどもと別れていくか親  
が試されるという。〔2001〕

## 「子育てのこころ——子どもの成長と親子関係」

浪花 博 創元社 1984年 1200円  
12号 最新刊案内をご参照下さい。〔2178〕

## 「子育ての心理」岩井勇児・岩井文子 福村出版

1981年 1300円  
子育ての様々な問題点をわかりやすく説く子育ての手  
びき書。性と結婚制度、育児情報整理、子どもの都合・親  
の都合、勉強をめぐる親と子、物とお金でなんとかした  
い親心、子育てと生きがいについて。〔2221〕

## 「子育ての森の中で——はたらく母親の記録」

三宅喜代子 労働経済社 1984年8月 980円  
働きながら子育てをしている10組の母親をルポ。〔2181〕

「子ども」 東京大学出版会 1979年 1200円  
東京大学公開講座30。子どもの権利、世界の子どもと健  
康、文学における子ども他。〔2041〕

## 「子ども一揆がやってくる」石井一朝 太陽企画出版

1983年 1000円  
元日教組編集部長が日教組を批判、教師に労働組合はい  
らない、教科書を国民検定になどという主張。“教育の  
荒廃”と“日教組”を結びつけて考えているのだが……。  
〔2161〕

## 「子どもが家を出ていくとき」リチャーズ&amp;ウィリス

片岡しのぶ訳 晶文社 1982年 1200円  
二人の女性心理学者が、長年にわたるカウンセリングを  
記録。親離れ、子離れに悩む人たちの事例を拾いあげる。  
親子の感情がもつれ、葛藤の渦中にあると、自己を客観  
視できない。それを乗り越える力を与える分析。〔2210〕

「子どもが主人公」 徳村 彰 徳村杜紀子 径書房  
1982年 1500円  
同じ目の高さで向かいあい、学びあい、発見しあう関係。  
“子どもが主人公”と自覚できる場所とは？子ども文庫の  
歩みの記録など。 [2214]

「子どもが友だちをつくるとき」 リチャーズ&ウィリス  
片岡しのぶ訳 1984年11月 1300円  
子どもが友だちをつくるとき、大人は一体どのような助  
言をしたらいいのか？子どもは一体どんな助言を待って  
いるのだろうか。本書は友人関係のあらゆる面を分析、  
解説してくれる。 [2211]

「子どもがわからなくなる日——体験的・男の子の育て  
方」 高見澤たか子 主婦の友社 1984年 980円  
中学生の息子との格闘を卒直に記録した子育ての本。男  
の子にかける愛情や期待感の中身を母親は洗い直さねば  
ならない。中学生になった息子は夫とは別のもう一人の  
異性として母親の生き方を鋭く問うている。 [2229]

「子どもからの自立——おとなの女が学ぶということ」  
伊藤雅子 未来社 1975年 1000円  
子どもをあずける体験を女性の自己教育活動につないで  
いこうとする公民館の保育室の活動を通してユニークな  
婦人教育にとりこんでいる実践の記録。女の人間の自立  
の意味を問う。本号書評欄をご参照下さい。 [1510]

「子どもが書いた離婚の本——親の離婚で不幸になっ  
たりはしない」 エリック・ローフス編 円より子訳  
コンパニオン出版 1982年 1300円  
アメリカ ボストン地区に住む親が離婚した子供たちが  
書いたもの。つらく悲しいことだがより強い人間になっ  
たと子どもたちはいっている。 [1599]

「子ども時代を失った子どもたち」 マリー・ウィン  
平賀悦子訳 サイマル出版会 1984年8月 1300円  
1960年代に入ってから、子どもが大人に似てきた。子ど  
もの世界と大人の世界の境界線を昔のように復活させる  
ことができるだろうか。数百人の子ども・親・教師への  
インタビューで、今子どもたちに何が起っているのかを  
追跡し、子ども時代の意義を再認識する。 [2203]

## 上野千鶴子の おんなの本・USA

(連載第2回)

### ベネケ「男から見た強姦」

ポルノグラフィや強姦<sup>レイプ</sup>についてのフェミニストの  
告発の書の中には、スーザン・グリフィンの「ポルノグ  
ラフィーと沈黙」[Griffin, Susan, 1981, *Pornography  
& silence: culture's revenge against nature*. NY:  
Harper & Row.]やブラウンミラーの「意志に反して」  
[Brownmiller, Susan, *Against our will: men, women  
& rape.*]など、すぐれたものがいくつもある。フェ  
ミニストのターゲットは性暴力の告発に向かっている  
が、とはいえ、レイプはいつかなくなりそうもな  
い。レイプを避けるためのノウ・ハウや護身術の教室  
も一時流行したが、最近では、レイプを防ぐことも、  
減らすことも見とおしがないから、女たちにできる唯  
一のこと、レイプにあうことを前提に、レイプにあ  
ったらどうやってそれをやりすぎずか、どうやってそ  
れから立ち直るか、を伝えあうことしかない、という  
ハウ・ツーものまで出ているくらいだ。

レイプは悪い。やったヤツは、みんな去勢すべきだ。  
——そうだ、そうだ、もっともなのだけれど、レイプ  
を告発するだけではいっこうにそれがなくならないの  
ならば、いっそ逆に、レイプを理解することが必要な  
んじゃないだろうか？

ティモシー・ベネケの「男から見た強姦——性暴



力についての  
男たちの言い  
分」(Beneke,

Timothy, 1982, *Men on rape: what they have to say  
about sexual violence*. NY: St. Martin's Press.) は、  
男性の著者が、レイプを犯した男たちの体験をインタ  
ビューした記録である。女から侮辱された自尊心の痛  
手から、コントロールを失ったり、あるいは脅えた女  
を前にして、はじめて力を感じて暴走したり……とい  
う、自制心を欠いた、不安で未熟な、傷つきやすい男  
の自我が浮かび上がる。それは、カッとして妻に手を上げ  
るふつうの夫たちの心理と、遠くへだたてはいいない。

性の抑圧については、抑圧される側の論理が、声高  
に叫ばれてきたが、抑圧する側の論理が解明されな  
いばかり、いつまでたっても対症療法にしかならない。  
レイプ撲滅のために、治安警察力を強化するハメにお  
ちいるとしたら、フェミニストの運動は逆効果だ。レ  
イプへと暴走してしまう男のセクシャリティの貧困を、  
その抑圧者の被抑圧から救い出してやること——この  
気の遠くなるような、理想主義のなかにこそ、フェミニ  
ズムのゴールはある。そのためには、女たちは、強姦者  
たちまで、理解してしまわなければならないのである。

## 「子どもたちの現在——子どもの文化の構造と論理」

齊藤次郎 風媒社 1975年 1500円

子ども調査研究所を主宰する著者が、子ども文化を大衆文化の重要な一環として位置づけ、子どもをひたすら保護し、教育し、管理しようとする思想とは正反対の思想を展開。子どもとともに未来を開こうとする人々に刺激を与えたロングセラー。 [2083]

## 「子どもたちの悲鳴——体罰シンドロームの学校で」

鈴木孝子著 保坂展人解説 風媒社 1985年1月 最新刊 1300円

著者は「教師の暴力を絶対に許さない会」の運動をすすめる世話人。教室という密室の中で教師の暴力によって登校拒否に追い込まれた母親を中心に、体罰がいかに子どもを歪める反教育的なものであるかを訴える。 [2230]

## 「子どもの遊びの空間」 藤本浩之輔 日本放送協会

1975年 750円

子どもたちの遊びの空間を社会学的・行動科学的に検討。戸外空間、施設空間、子どもの組織を検討。 [2121]

## 「子どもの自殺」 稲村 博 東京大学出版会

1978年 980円

子どもの自殺の実態、子どもの自殺の特徴、子どものおかれている状況、子どもの自殺の周辺問題、子どもの自殺の防止など。 [2040]

## 「子どもの文化人類学」 原ひろこ 晶文社 1979年

980円

文化人類学者の立場から子育てについて、極北のインディアン、イスラム教徒の生活を例にあげながら育児・親子関係を考察。 [2206]

## 「子どもの本の現在」 清水真砂子 大和書房

1984年9月 1400円

同時代を生きる児童文学作家論。石井桃子、神沢利子、松谷みよ子、灰谷健次郎、今江祥智など。特に灰谷文学を批判し、良心的な人間のひとり相撲、しょせん自己満足でしかない。今日の支配的な思想から脱脚しようとして一歩踏み出した“反”の思想は本当に人間を解放するのか?という。 [2207]

## 「子どもをあずける——子どもを育てながら自分を育てるために」 国立市公民館保育室運営会議編 未来社

1979年 1200円

なぜ公民館に保育室を置くのか。創設以来15年の活動を点検。 [2137]

## 「子どもをあずけて働くということ」 佐藤洋子

大和書房 1981年 980円

あずける側に立つ親が、あずけることにまず誰も慎重でなければならない。子どもをあずける第一歩はその子どもをどう育てるかの第一歩であると、著者自身の子育て体験を通して保育問題をルポ。仕事と子育て、私の育児日記から、無認可保育所現場から、ベビーホテル、働く女の迷いと悩みなどをとり上げている。 [2036]

## 「子を持つ女が輝く時」 佐藤洋子 教育史料研究会

1981年 1200円

新聞記者の著者は39才で初産。子を持った喜びは自由にはばかきたいと思う自分の手足を縛りつける重ささ一對だった。喜びと重さを持つ子どもから学んだことをまとめたという。“働く”“働かない”以前の問題から深く掘りさげ、子育てを考える。 [2194]

## 「孤立化する子どもたち」 深谷昌志 日本放送出版協会

1983年 750円

モラトリアム化する若者たちの姿は、本書で触れられている子どもたちの成長過程の延長線上に位置している。社会から孤立した、狭い生活空間の中で成長していく子どもたちの姿に危機感を抱く。 [2196]

## 【し・す】

## 「仕事も子どもも」 A・ローランド, B・ハリス

矢木 児玉 笠倉 森屋他訳 勁草書房 1984年12月 最新刊 2200円

キャリアと母性の二重役割のアイデンティティに悩む働く女性の心理を学際的に考察。働く母親の囚われている罪悪感と葛藤、単に女性の問題ではなく、男性の問題でもある点を強調。本号“子育て”のテーマの問題意識に即した内容。一読をおすすめする。 [2232]

## 「思春期の子どもとつき合うための Q &amp; A」

レオナード・H・グロス編 安田里美訳 1983年 980円

アメリカの権威ある専門家が、十代の子供をもつ親の問いに明快に答える。親子のコミュニケーション、離婚と子供、セックス、異性問題、非行としつけ等。 [2174]

## 「10代の子を持つ親の本」 ジョエル・ウェルズ

鈴木グレース, 上田睦子訳 岩波書店 1984年 430円

“10代の子供を持つ親が生きのびる法”いう原題で書かれた本。5人の子供を育てあげた親業のベテランが非行、家出、性などの問題をユーモアこめて語る。 [2167]

## 「女子非行の世界——個別指導と新しい学校づくり」

山本明弘 民衆社 1983年 1000円

定時制高校は非行の吹きだまり。切り捨てられてきたつっぱり生徒たちは心に深い傷を負っている。彼女らを立ち直らせた教師の実践記録。 [2213]

## 「新・身分社会——学校が連れてきた未来」 佐田智子

太郎次郎社 1983年 1400円

一生懸命勉強すれば、身を立ても上げられる。明治以来の教育の機会均等平等さが、社会の活力となってきた。1960、70年代高度経済成長と比例して激しい競争主義を教育の場に持ち込み、教育を通じてつくり出される身分社会ができてきた。現代教育批判。 [2165]

## 「好かれる母・嫌われる母」 坂本 亮 明治図書

1967年 1600円

北海道で綴方教育にかかわっている著者が小学生の作文を通して母親について語る。 [2066]

## 【た・ち・と】

## 「胎児からの子育て」 大島 清 築地書館 1983年

980円

著者は医学部出身で産婦人科学と、のちに霊長類の研究に入ったユニークな学者。母親の受けたストレスが胎児にひびき、文明が生み出す環境汚染も無防備な胎児の脳をおびやかす。胎児からの子育ての大切さを述べている。 [2166]

## 「胎児の環境としての母体——幼い生命のために」

荒井 良 岩波書店 1976年 430円

赤ちゃんの健康は生後の配慮だけでは守れない。妊娠に始まり、胎児・生産への過程での大切な知識をわかりやすく解説。 [2062]

## 「魂の殺人——親は子どもに何をしたか」

アリス・ミラー 山下公子訳 1983年7月 2400円  
アリス・ミラーは1923年ポーランド生まれ、スイスのバーゼルで社会学・心理学を学んだ精神分析家。教育やしつけの名による人間性の恐るべき破壊、特に乳幼児期の子どもたちの苦しみと精神分析の光をあてる。ヒトラー、麻薬常習少女クリスチアーネ、性的殺人者バルチュの運命を分析し、教育の果たしたマイナスの役割を明らかにする。 [2189]

## 「知的子育てのすすめ——古い子育てに真向から対決する女性論」

池木 清 行政通信社 1980年 850円  
男女・長幼に差をつけるなど、女性の下で働ける男性を育てること。理想の母など目指す必要はない。女の子だから無理ということはない、チャンスがなかっただけなど好感度満点の男性の書いた子育て論。著者は総理府で青少年白書を作成している行政官。 [2133]

## 「中学生になぜ制服か」

久世礼子 三一書房 1984年10月 1900円

学校管理の本質に迫る制服拒否の記録。著者一家の制服のたたかいを当事者であった子どもたちも意見をのべている。入学時には“親がそういうから”ですましていた事が、卒業時には“僕がそう思うから”になったという。著者はこの体験を子どもたちに生かしてほしいと願う。自分の自由を自分で使える人間、相手の“NO”を大切に作る人間になってほしいと願う。 [2233]

## 「父親の自立と子育て」

木村 栄 汐文社 1982年 1200円  
著者は姉妹篇「母性をひらく」で母親の自立こそ母性をひらく方向があると述べた。それでは父親とは何なのか？父親不在の問題を性別分業の見直しとのかかわりの中で考える。 [2164]

## 「父親の役割——乳幼児発達とのかかわり」

M・E・ラム 久米 稔、服部広子他訳 家政教育社 1981年 3800円  
子供の心理的発達で果たす父親と母親の役割は異なったものであり、父親も実際に、重要な役割を果たしている。この事実はあまりにも無視されてきた。 [2007]

## 「テレビと子どもたち——消えた画面はどこへ行く」

ノーマン・S・モリス 武田尚子訳 サイマル出版会 1972年 1200円

テレビは子どもの世界をどう変えているのか。商業主義と大人の便宜主義のあいだで放置される子どもたち。TVを有効なメディアにするための実態調査とレポート。 [2234]

## 「共ばたらき女教師の記録」

井伊磯子 栄光出版社 1979年 800円  
共働きの育児、共働きの母として、共働きの楽しさ、ぎりぎりに追いつめられたとき、病気など体験の記録。 [2004]

## 「共働きの子育て——共働きは非行の温床か」

樋口恵子 フレベール館 1984年9月 980円  
第13号 最新刊案内をご参照下さい。 [2179]

## 【な・に・の】

## 「悩んで人間じゃないですか」

なだ いなだ 主婦と生活社 1984年6月 980円  
親と子の関心の中心が学校となっている現代。人間は学校のために生きるのではなく、生きるために学校へ行くのであるから……。主体性を持たない人間は無用な情報に振り回される。親ばなれ、子ばなれ、子供の本音と悩みなどユニークな親子論。 [2209]

## 「日本人と母——文化としての母の観念についての研究」

山村賢明 東洋館出版社 1978年 2000円  
日本の母は単なる子の親としての意味を越えた存在である。日本の母のあり方、日本の母のおかれてきた状況を説明、考察する。 [2043]

## 「乳児期の母子関係」

小嶋謙四郎 医学書院 1981年 4000円  
乳児の精神過程における母親への持続的な反応システムをアタッチメントと呼ぶ。乳児期の母—子相互について、アタッチメントの発達をめぐる研究の動向を紹介。 [2086]

## 「のびのび子育て 12章」

吉武輝子 日本書館 1981年 980円  
思春期の娘と交わす母娘談義でユニークな子育て論を展開。著者の娘はフェミニスト二代目として、のびのび育ち現在活躍中。宮子あずさ著「あずさの性の話・生の話」(12号 最新刊案内にあり) [2047]

## 【は・ひ・ふ】

## 「働く母親の時代」

岩男寿美子・杉山明子編 NHK ブックス 1984年 750円  
急増する働く母親と、その子どもの関わりを中心に、それぞれの意識と実態を明らかにした豊富なデータをもとに、今後の働く母親のあり方を考える。 [2716]

## 「働く母の育児の工夫」

岡田嘉代 明治図書 1980年 1800円  
小学校女教師の育児体験記録。共働きをする母親のための生活のヒントが多く載っている。 [2075]

## 「母親が仕事をもつとき——子育て、職場・夫にどう向き合うか」

久田 恵 学陽書房 1982年 1200円  
一歳の息子を保育園に預けて仕事をする著者がその体験を通して、自分と子どもを生かす場所としての子育ての場 保育園を考える。 [3121]

## 「母親業の再生産」

ナンシー・チョドロウ 大塚光子・大内管子訳 新曜社 1981年 2800円  
実際に母親になる以前から、女は母親業に適応するように母親業が幾世代にもわたって再生産されていくメカニズムを学問的に分析。 [0685]

## 「母と子に喝采——登校拒否を克服した母と子の記録」

岩佐 巖 斗夢書房 1981年 980円  
素直で何の問題もなかったいい子ちゃんかとるにたらないことがきっかけで学校へ行かなくなる。“うちの子だけは”は通用しない時代になってきている。 [2138]

## 「&lt;母と子&gt;の民俗史」

フランソワーズ・ルークス 福井憲彦訳 新評論 1983年 2200円  
フランスの19C末～20C初めにかけたの子産み・子育てにまつわる諸慣行の研究書。母と子のからだと民間医療の問題を通して民衆文化を描く。 [1714]

## 「母と娘の関係 上——母の中のわたし」

ナンシー・フライデイ 講談社 980円  
著者の幼ない日々より光と影のようにして影響を与えてきた“わたしの中の母”を分析。セクシュアリティの問題にも触れている。 [2021]

## 「母と娘の関係 下」

菊地澄子 教育史料出版会 1985年1月 最新刊 1200円  
双子の娘たちはいつのまにか著者と同じ教師になり“親離れ宣言”。母と娘の自立戦争がはじまった。 [2233]

「母よ、殺すな」 横塚晃一 すずさわ書店 1975年  
980円  
差別や抑圧と激しく闘いつづけて逝った重度脳性マヒ者の記録。健常者が支える現代社会の矛盾と偏見を突き、真の福祉行政のあり方を問う。本多勝一の序文あり。  
〔2046〕

「非行少女の心理——急な坂をころげ落ちるように」  
麦島文夫 坪内順子 有斐閣 1982年 580円  
思春期の少女の十人に一人は非行化すると言っても決してオーバーではない。最近の女子非行の特徴、女子が非行に陥る心理、非行少女のタイプなど非行行動の本質を探る。  
〔2117〕

「非行少女の心理」 安香 宏 瓜生 武他 有斐閣  
1979年 580円  
非行をつくる環境、非行と社会化 非行からの回復過程、非行をふせぐために(目次より)  
〔2113〕

「ひとりっ子の本——父さん母さんをウラむな」  
依田 明 情報センター 1981年 780円  
20年前には子ども人口の5%にすぎなかったひとりっ子が現在はその倍に急上昇。児童心理学者の著者がひとりっ子を分析。インスタント時代がつくるひとりっ子。ひとりっ子ときょうだいのいる子との違い。ひとりっ子に責任はない。ひとりっ子のための母親学。  
〔2141〕

「ふたこのお母さんがんばって」 ツインマザーズクラブ、  
天羽幸子編 主婦の友社 1984年10月 880円  
13号最新刊案内をご参照下さい。  
〔2182〕

「プラス・ラブ——母性本能という神話の終焉」  
エリザベート・バダンテール 鈴木 晶 サンリオ  
1981年 1500円  
西欧の近代史における母性愛の変遷を考察し、母性愛・母性本能とは何かを論じる。“母性”イデオロギーの形成過程を追究。  
〔0510〕

## 【ほ・ほ】

「保育園 110番」 保育園を考える母親の会編  
ユック舎 1983年 1100円  
働く母親たちがつくった保育園の手引書。仕事と子育ての狭間で苦しんでいる女性たちへの体験にもとずいた熱いメッセージ。“保母も同じ働く仲間”との意識を分かち合うこと、夫を保育にまきこむには、家事の手抜きも作戦のひとつ、開き直りも必要ですなど興味深い。  
〔2170〕

「保育の現場から——保育一元化を求めて」  
東京保育問題研究会編 勁草書房 1980年 1300円  
保育を原点からとらえ、幼稚園の教諭と保育所の保育者が一体となって就学前の子どもを保育する保育一元化の原理をめざす現場実践者の記録。急速に変化する家庭生活のなかで育児様式がかわり、家庭と保育者が協業できる保育の創造をめざす。  
〔2013〕

「母原病——母親が原因でふえる子どもの異常」  
久重重盛 サンマーク出版 1985年  
(新装版 初版 1979年) 各980円  
母親の間違った育児がどれほど子どもに大きな影響を与えるか、病根は母親という、賛否両論の問題の書。80万部売れたという。正・続・続々と3巻あり。  
〔2012〕

「母性愛の研究」 平井信義 同文書院 1976年 3200円  
児童心理学の立場から母性愛を考察。母性意識の形成過程の調査によると、中学卒業後、結婚するまでの間に幼ない子どもに接触する機会を多く与えることが、母性意識を形成するのに大切で、子ども好きの感情を呼び起こすという。  
〔2088〕

「母性社会日本の病理」 河合隼雄 中央公論社 1976年  
1200円  
ユング派の心理療法家による日本文化の分析。多数の論文を掲載。  
〔2089〕

「母性をひらく——子どもとともに歩む自立への道」  
木村 栄 汐文社 1980年 1200円  
働く女性にとって辛いけれども仕事をやめて子育てに専念すれば、少くとも子どもを救うことはできる。しかし専業主婦の生活には自分のない生活の苦しみ、再び子どもの発達を損うという体験をもつ著者が、母性の解放とは母性が苦しみでも重荷でもない女の生き方を模索。母性信仰からの解放、社会的母性の構築、明日をひらく母性など一読をおすすめする。  
〔2028〕

## 【ま・み】

「ママ、お魚やさんだったらよかったのに——働くお母さんの子育て相談室」 前田京子 青英舎 1985年  
1000円  
教師生活40年の著者が働く母親の先輩として、子育ての悩みに答える。“子育ての責任者はだれか”“親の仕事を見ている子ども”“仕事と出産”など熱かいまなざして語る。  
〔2228〕

「ママ堂々としているよ——母と娘のふれあい学」  
樋口恵子 自由現代社 1982年 950円  
著者の個人的体験を中心とした子育て論。  
〔2188〕

「円(まる)テーブルの家族——子どもが求める親の愛は」  
円より子 文化出版局 1983年 950円  
100の離婚家庭の子どもたちを取材し、従来の家族観・親子観で子どもを縛ろうとするのは親のほうだった。大人の固定観念の方に問題があった。著者の求める円テーブルの家族とは?  
〔2215〕

「密室の母と子」 川名紀美 潮出版(文庫最新刊)  
1980年 360円  
母子密着の実態を“ダイヤル避妊相談室”に取材し、病んでいる家族問題、母子関係をルポ。最近文庫版として再版された。  
〔2002〕

「緑の葉が繁った——家庭内暴力は必ずなせる」  
愛原由子 サンマーク出版 1983年 1200円  
13号 最新刊案内をご参照下さい。  
〔2183〕

「みみずの学校」 高橋幸子 思想の科学社 1984年  
1800円  
13号 最新刊案内をご参照下さい。  
〔2186〕

## 【や・り】

「野生への旅——いのちの連続を求めて」  
ジーン・リードロフ 山下公子訳 1984年12月 1600円  
ニューヨーク出身の著者の2年半南米の密林で石器時代そのままの生活の体験記。ニューヨーク・タイムズなど各紙で絶賛される。人間が自然の流れに沿って生きることの素晴らしさ、文明社会の失ったかけがえのないものを見出す旅。子育てのヒントも多い。  
〔2190〕

「両親とは何ですか」 山田順子 講談社 1983年  
1200円  
家庭内暴力児となった子どもたちの告白。子どもが家庭内暴力児になってしまったらどうすればよいか。わが子を家庭内暴力児にしないための十則。子どもの苦悩と心を理解するための手がかりとなる本。  
〔2085〕 次頁へ

## 現在ウィメンズ ブックストアで扱っているミニコミ

(第13号発行後に入荷したもの)

- 5369 「ことば5号 女性による研究誌」現代日本語研究会 (1984.) 500円 収録されている“国語辞典研究——女の目でみた『広辞苑』”は「女性の目からみた商品研究論文大賞」を受賞した。
- 5370 「We (新しい家庭科) 12月号——つき合いを考える」 (1984. 12) 530円
- 5371 「We (新しい家庭科) 1月号——“学び・教える”とは」 (1985. 1) 530円
- 5372 「We (新しい家庭科) 2・3月号——“育てる”ということ」 (1985. 2) 530円
- 5373 「月刊あごろ92号——国会で語られた“均等法”社労委議録その4他」あごろ編集部 (1984. 11) 350円
- 5374 「月刊あごろ93号——女が働くということ他」 (1984. 12) 350円
- 5375 「月刊あごろ94号——女性運動と行政 (日本女性会議 '84 なごや不参加の立場から)」 (1985. 1) 350円
- 5376 「あんだんて5号——昭和史と女性 (日本ファシズムと女性を学び終えて他)」宝塚女性史グループ (1983. 3) 500円
- 5377 「あんだんて6号——戦後混乱期と女性他」 (1984. 10) 500円
- 5378 「1979年現在 vol. 6——水田珠枝“女性解放思想史”を読む, 他」女性問題研究会 (埼玉) (1979. 12) 1200円
- 5379 「1980/81年現在 vol. 7 合併号——水田珠枝“女性解放思想史”を読むⅡ他」 (1981. 1) 1400円
- 5380 「1982年現在 vol. 8——女性解放と家族他」 (1982. 12) 1000円
- 5381 「1983年現在 vol. 9——歴史教育における女性史他」 (1983. 12) 1000円
- 5382 「働く女性たち be able No. 10——特集スペシャリティを切り札にして他」マンパワー・ジャパン社 (1985. 1) 500円
- 5383 「あい ふぉーらむ No. 27——特集 東洋の星が落ちたノ (ガンジー首相の死)」あさ企画 (1984. 11) 600円
- 5384 「あい ふぉーらむ No. 28——特集 父子家庭はいま」 (1984. 12) 600円
- 5385 「女性史研究第19集——特集「家族の起源」100年」家族史研究会 (熊本) (1984. 12) 500円
- 5386 「婦人問題懇話会会報 No. 41——家族の未来を考える」婦人問題懇話会 (1984. 12) 450円
- 5387 「立命評論79号——特集自分の♀を大事にしてみるか」立命館大学内 立命評論編集部 (1984. 12) 300円
- 5388 「スタート (結婚と離婚を考える雑誌) No. 5——特集 新しい家族の肖像, 妻からの離婚の訴え」 (1985. 冬) 780円
- 5389 「避妊フィルムのキケンを見やぶろうノ——女のからだに合成洗剤はいらぬノ」避妊フィルム“マイルーラ”の毒性を考える会 (1984. 10) 400円
- 5390 「未亡人たちの戦後史 (上), (中), (下)——茨城県未亡人連盟『母子草』から」鈴木圭子編 (1983) 筑波書林 各 580円
- 5391 「WIFE 191 (女の言いたい放題誌)——特集 集合住宅で生きる」 (1985. 1) 450円
- 5392 「WIFE 192 (女の言いたい放題誌)——特集 私のやってみたセールス」 (1985. 3) 450円

### (前頁よりつづく) 【雑誌】

- 思想の科学 No. 24——「母親は必要か」思想の科学社 1982年11月 570円  
母親について難問・愚問にお答えします。 [2218]
- 人生読本「母親」河出書房新社 1984年 880円  
特集「諸悪の根源, 女親にあり」だなんて……。 [2023]
- あごろ 21号「子と母の関係を問う」BOC 出版部 1979年10月 1100円  
親離れ子離れ考, 母子密着を生む閉塞状況 [5029]
- あごろ 81号「子どもがあぶない」BOC 出版部 1983年12月 1400円 [5269]
- 「今, 子供になにが起こっているのか」  
食品公害セミナー, 坂本玄子, 高橋暁正他 神戸学生・青年センター出版部 1982年 600円

学校給食と子供の健康, 小学生の体と心など, 栄養士, カウンセラー, 薬害研究者たちの講演集。 [2231]

「親から親へのメッセージ——非行を防ごうガイドブック」親からのメッセージの会編 1984年4月 450円  
非行を防ぐために京都の母親グループがとり組んだガイドブック。海外生活体験者が語る海外事情も。 [2235]

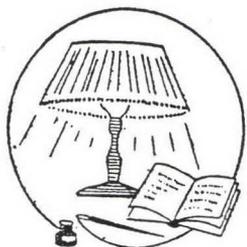
「いま親ができることは…… Part II」  
親からのメッセージの会編 1984年9月 550円  
子どもを問題行動に走らせないためのガイドブック Part II。中国視察を通じた子育て事情。京都を訪れた外国人へのインタビューなど多彩。 [2236]

「GAZETTE」子どものテレビの会 (FCT) 発行  
テレビの送り手と受け手と研究者がより良いテレビの実現をめざす会の会報。

連絡先 神奈川県葉山町長柄1601-27

—女性のための—

## 最新刊案内



—1984年12月～  
1985年2月及び  
第13号未掲載分—

## 【性・からだ・心理】

- 0176 「妻が危ない——主婦の精神衛生相談」 池田由子  
弘文堂 1984年10月 1600円  
著者は国立精神衛生研究所の研究者。3年間にわたる家庭の主婦の実態調査を行ない、統計、資料で実証的に主婦の精神のバランスが崩れていること、もっと主婦の精神衛生に注意を払うべきことなどを提言。
- 0177 「女性と狂気」 フェリス・チェスラー  
河野貴代美 ユック舎 1984年12月 2000円  
著者は44歳のニューヨーク市立大学心理学教授。女性の狂気が今までどのように精神分析理論の中で定義され、精神病院や臨床医によって扱われてきたかを入院、治療を受けた女性に取材し、その実態を明らかにする。また精神病院の女性患者であったエリザベス・パッカー、エレン・ウエスト、ゼルダ・フィッツジェラルド、シルヴィア・プラスの生を分析。興味深い。
- 0178 「イフ」 ギデスチ・アンダソン 福原・水浜訳  
潮出版社 1984年12月 900円  
まさか、私には起こらないだろうと思っていたことが、突然起きた。乳ガンに冒された悲痛な体験を通して生きるとは？自己省察を含んだ人生論。著者はノルウェーの女性作家。
- 0179 「性——妻たちのメッセージ」 グループわいふ編  
径書房 1984年11月 1300円  
主婦の投稿誌 WIFE が行ったアンケートによる261人の妻たちの性と生のレポート。
- 0180 「家族内性愛」 南 博 朝日出版社 1984年  
1000円  
現実の家族の中で起こり得る近親相姦とは？家族の機能と性・生殖とはどのような関係にあるかを探る。家族内性愛に対して正しい対応ができるように大人・子どもにも性教育の大切さを説く。
- 0181 「人間の性とは何か」 ミルトン・ダイヤモンド  
アーノ・カーレン 田草川まゆみ訳 小学館  
1985年1月 5800円  
性教育学講座。性にかかわる情報を生物学・医学・心理学・社会学にわたる学際的なレベルで体系化した性教育。

- 0182 「モア・レポート(2)」 モア編集部 集英社  
1984年10月 1200円  
男性へのセックス調査64問。「モア・レポート」女性版と呼応している。つくられた男らしさ女らしさ。
- 0183 「女・心とからだ——婦人科相談室の5000枚のカルテより」 内田真砂・赤松彰子 創元社  
1984年12月 1000円  
産婦人科医院に併設された保健相談室を訪れる女性の悩み、中絶・未婚の妊娠など。ユニークな活動報告。

## 【自伝・評伝】

- 9030 「平民社の女——西川文子自伝」 西川文子  
青山館 1984年12月 2600円  
青鞜派のかけにおかれて余りに知られることの少なかった西川文子(1882—1960)の自伝。
- 9031 「コスモスの詩——松花江にときは流れて」  
石井克則 みずち書房 1984年 1500円  
旧満州で女医として華やかな時代を送った久保田緑は、戦争の悲惨さを体験。戦後は中国民衆への贖罪の気持も含め、日中・友好につくす。
- 9032 「舞踏に死す——ミュージカルの女王・高木徳子」  
吉武輝子 文芸春秋 1985年2月 1300円  
浅草オペラの勃興期、米国仕込みのミュージカルを演じ、すい星のごとく演劇界を駆け抜け29歳で無念の死をとげた高木徳子を著者は鎮魂の意をこめて甦えらせる。
- 9033 「マネキン・ガール——詩人の妻の昭和史」  
丸山三四子 時事通信社 1984年10月 1200円  
抒情詩人 丸山薫と結婚した著者は不況にあえぐ昭和初年 新しい女性の職業マネキン・ガールとして生活を支える。当時の社会風俗や、詩人・作家・新劇女優たちとの交遊やエピソードを語る。
- 9634 「夢のかけ橋——晶子と武郎有情」 永畑道子  
新評論 1985年1月 1500円  
歌の新解釈・新資料を駆使して2人の魂の消長をたどる。

## 【女性史】

- 1271 「火を産んだ母たち——女抗夫からの聞き書」  
井手川泰子 葦書房 1984年11月 1300円  
筑豊育ちの著者が危険だらけの坑道の奥で重労働に従事した元女炭抗夫の聞き書き。
- 1272 「売娼の社会史」 吉見周子 雄山閣 1984年12月  
1700円  
売春は社会問題でありながら問題になってこない。女性と遊ぶことが男の甲斐性とされる性差別の社会構造を社会史的に追求し、近代史の盲点に光をあてる。
- 1273 「山陽路の女たち」 広島女性史研究会編著  
ドメス出版 1985年1月 1600円  
地元の女性たちによって掘り起された広島、山口、岡山の近代女性史。福田英子、清水紫琴、九津見房子、ハワイ移民の女たち他

## 【女性論】

- 0744 「女の選択——生む・育てる・働く」 高良留美子  
労働教育センター 1984年12月 1300円  
女の生き方を探るエッセイ。主婦業に逃げこむな、歴史の限界を生きた女性・ポーヴォワール、高群逸枝とアジアについて、自己と党の神話化・宮本百合子など。

0745 「対幻想——n個の性をめぐって」 吉本隆明  
聞き手芹沢俊介 春秋社 1985年1月 1400円  
吉本隆明が性・家族・フェミニズムを語る。イリイチのジェンダー、シャドウ・ワークにもふれ、主婦論争、モア・レポートなど興味深い内容。ドゥルーズ&ガタリの“n個の性”とは？

0746 「性・労働・婚姻の噴流」 山本哲士・樺山紘一編  
新評論 1984年12月 1800円  
「シャドウ・ワーク」「ジェンダー」を受け、イリイチ思想に橋をかけると題された吉本隆明の講演記録。労働からみたジェンダー——河野信子、政治セックスの婚姻と労働——山本哲士他。

0747 「広告のなかの女たち」 島森路子 大和書房  
1984年8月 1300円  
戦前18人・戦後32人の広告に登場する女性50人を分析し、大衆の美意識、価値観の移り変わりを捉える。1975年のパルコの広告に新しい広告の女性像をみる。

0748 「離婚後の妻たち」 毎日新聞社大阪社会部  
朱鷺書房 1984年1月 980円  
新聞社社会部の記者たちが離婚の取材を通じて感じるのは男の家庭における保守性と幼児性であるという。結論として、女性に離婚を恐れないでほしい、自信を持って生きてほしいと主張することになったという。離婚経験者への直接インタビューや取材を通じて男女のあり方、社会のあり方を問う。

0749 「男らしさのジレンマ——性別役割の変化にとまどう大学生の悩み」 M・コマロフスキー  
池上千寿子・福井浅子訳 家政教育社  
1984年7月 2500円  
女性学の視点からアメリカ・バーナード・カレッジの男子学生を対象に男役割を調査・分析。女役割の解明の手がかりとする。男性学の先駆。

0750 「女の社会学 男の家庭学」 金森トシエ 新潮社  
1984年10月 1100円  
婦人記者として、また現在神奈川県立婦人総合センター館長として活躍中の著者の女性論。新しい時代にむけての男女・社会問題を考える。

0751 「性の政治学」 ケイト・ミレット 藤枝渥子他訳  
ドメス出版 1985年2月 4800円  
70年代の女性解放運動の聖書といわれ世界中で熱烈に読まれたフェミニズムの古典。復刊で甦える。

#### 【労働・法律】

3145 「女のオフィス革命——コンピュータ時代は女性がリードする」 篠原滋子 TBSブリタニカ  
1984年11月 1000円  
編集者、TV ニュースキャスターを経て女性だけのソフトウェア会社を設立した著者が明かす女の発想のニューメディア論。生活に根ざしたあたりまえのことが大切という、オトコ社会に女性の流儀を持ち込んだ。

3146 「はたらく女性の保護と平等」 島田信義  
新日本出版社(新書) 1984年11月 560円  
戦前・戦後の婦人労働者による保護と平等を求めたたかひの歴史的発展を法的側面から解説。終章——いまもとめられる男女雇用平等法。

3147 「いま家事労働に問われるもの——共働きからのメッセージ」 渡辺みよ子・菊沢康子他 有斐閣  
1984年10月 1500円  
妻であり母であり、子育て真最中の共働きの女性研究者8名が分担し、家事労働をめぐる諸問題を考察。

3361 「聡明な女は民法に強い——民法が答える女の人生案内」 菊本治男 三笠書房 1984年 890円  
男女間のトラブルに法的見地からアドバイス。“法律はかならずしも女性の都合のよいようにはできていない”との警鐘も。

#### 【老後問題】

4731 「おじいさんの台所——父・83歳からのひとり暮らし特訓」 佐橋慶女 文芸春秋 1984年4月 1000円

4732 「おじいさんの台所二年目」 1985年1月 950円  
日本エッセイストクラブ賞受賞。家事がまるでダメの83歳の父が母の死後哀しくもユーモラスな生活大革命。

4733 「さあこいノ老後」 樋口恵子編 亜紀書房  
1985年2月 1200円  
“高齢化社会をよくする女性の会”による生活設計、暮らしの実務の詳細なノウハウ。老後の経済的自立のための情報多数。

#### 【ドキュメント・科学】

8092 「いのちの底が抜けた——少女と天皇の国」  
石元シゲ子 径書房 1984年11月 880円  
小学校を中退し11才で女工となり独学で古代史を学ぶ。持っていた本(発禁本)を理由に12才で反戦思想の持主とされ、特高に死ぬほど拷問を受ける。日本という国体の恐ろしさに泣いた日々をつづる体験記。

8093 「女たちの風船爆弾」 林えいだい 亜紀書房  
1985年2月 1500円  
戦争末期撃ちてしまん・米英撃滅を合言葉に九州・小倉でアメリカ本土を攻撃するため、風船爆弾を作っていた女子挺身隊があった。それは秘密兵器として太平洋を飛んだ。平和の願いをこめて当事者たちに取材。

8094 「女たちの死刑廃止論」 死刑をなくす女の会編  
三一書房 1984年9月 1500円  
死刑廃止運動にかかわって3年。女の視点から多様な廃止論が書かれている。中山千夏、駒尺喜美、田辺聖子他。

8095 「女性の目から見た現代医療」 谷みゆき  
勁草書房 1985年1月 1800円  
“医療のひずみ”は女性にしわよせされている。女性と病氣、看護の問題を明らかにする。

8096 「女性科学ジャーナリストの眼」 大熊由紀子  
勁草書房 1985年1月 2100円  
“科学的なものの見方と考え方”と“社会”の接点を朝日新聞の記者である著者が語る。原子力、中国でみたもの、スウェーデンの医療、臓器移植など。

8097 「科学者の女性史——コワレフスカヤからマクリントックまで」 宮田親平 創知社 1985年1月 1500円  
9名の女性科学者が果たした歴史的役割と人間像 女性数学者—ソフィア・コワレフスカヤ、パリに死した原子核物理学者—湯浅年子他。

## 【エッセイ・その他】

8508 「手のなかの暦」 沢地久枝 大和書房  
1984年10月 1000円  
最新エッセイ集

8509 『「中流」の構造——丸岡秀子評論集6』  
丸岡秀子 未来社 1985年1月 2500円  
現代の豊かな社会の中で生活は中流と答えることはでき  
ても、どれだけの人が心の在り方について安らかな答を  
することができようか(本文より)

8510 「女性のための文学入門」 小田切秀雄  
オリジン出版センター 1984年11月 1600円  
日本の近代文学の女性作家と昭和の戦前期の文学。

8511 「女の気持ち——New York 発」  
ジェーン・オールリ 河野貴代美訳 1984年12月  
880円

「タイム」「ミス」「ヴォーグ」等で活躍中の女性ライタ  
ーが愛・仕事・家庭を語る。

8512 「さよなら男の時代」 三枝和子 人文書院  
1984年11月 1500円  
作家三枝和子の女性に関するエッセイ。権力主義的発想  
のすべてにさよならを言いたい。女の論理・女の情念か  
ら世の中をみるとどうなるか。興味深いエッセイ集。

8513 「おんなの原風景」 藤久ミネ TBS ブリタニカ  
1984年11月 980円  
奈良岡朋子、宮尾登美子、朝吹登水子、中根千枝、岩谷  
時子、高野悦子にインタビュー。各分野で活躍中の6人  
の女性たちが、何をするかをつねに自分自身で探知し、  
ほんとうの自分自身に出会うまでの模索を語る。

8514 「男はせいぜいこんなもの」 十返千鶴子  
朝日新聞社 1984年11月 1000円  
“男を叱る”という題名のもと書かれたエッセイ。女たち  
はとくに偽装された“女らしさ”から脱皮し始めている  
のに男たちは男らしさのヒロイックな鎧を着たまま……。  
男性が自然にらしくなって生きることをお勧めする。

8515 「八十歳の宣言——人間を生きる」 住井すゑ  
人文書院 1984年11月 1300円  
著者の「橋のない川」は500万部をこえるロングセラーと  
なっている。82才になった著者は現在も茨城県牛久沼の  
ほとりに住み、農村問題や反戦平和運動に情熱を燃やす。  
自伝的書き下しエッセイ集。

8516 「怪傑ノハウスハズバンド」 村瀬春樹  
晶文社 1984年11月 1200円  
“主婦業はついに解体されたのだ。この革命は、いっしょ  
に暮らす男と女が気をあわせ、しっかり肚を決めれば、  
誰れにでもできるやさしい革命だ”という爽快な1944年  
生まれの男の“主婦”のお話。「本音で生きようノハウス  
ワイフ」と読みくらべられたし。

8517 「新宿はおんなの街である——ふれあいつつ、たた  
かいつつ」 古屋能子 第三書館 1984年12月  
2000円  
“新宿へ平連”，“戦争への道を許さない女たちの会”で戦  
った著者の遺稿集。新宿の街を描いた当世風呂屋風景は  
面白い。

8518 「ひとり暮らしの知恵——衣・食・住・交際百科」  
吉沢久子・佐藤順子 大和書房 1984年12月  
990円

8519 「女・男・いのち」 大庭みな子 読売新聞社  
1985年2月 1200円  
女の戦争史、性の持続、恋文にあらわれた怖ろしい真実  
など。最新エッセイ集。

8520 「紫のふるえ」 アリス・ウォーカー  
柳澤(ヤンソン)由実子訳 集英社 1985年2月  
1400円

13号“カナダ通信”(オタワ Women's Bookstore)で紹  
介の The Colour Purple の邦訳。ピューリッツァ賞、  
全米図書賞受賞の現代女性作家の作品。

8521 「ジャスミンの魔女——南フランスの女性と呪術」  
E・ル＝ロワ＝ラデュリ 杉山光信訳 新評論  
1985年2月 2400円  
フランスのアナール派の旗手による魔女研究。

## 【雑誌・資料】

7348 働くなかまのブックレット1  
「現代おんな働き——均等法はいらない」  
働くなかまのブックレット共同編集委員会  
新地平社 1984年11月 400円  
職場の仲間たちが協同作業によって刊行。対談—男が語  
る均等法——働く女の足をひっぱる男。労働組合、マイ  
ホーム、現代おんな働き——コンピューターと労働疎外。

7349 法学セミナー 増刊「女性と法」 日本評論社  
1984年2月 1300円  
男女平等への世界的潮流——水田珠枝、男女平等とは  
——金城清子、男女雇用平等法——中島通子、基本文献  
案内 他

7350 季刊 女子教育もんだい「特集 いま、家族とは  
何か——家庭科男女共学の手がかりを求めて」  
1985年冬号(22号) 労働教育センター 880円

7351 思想の科学 No. 55 「特集 老いて何ができる  
か」 思想の科学社 1984年11月 臨時増刊号  
840円

7352 思想の科学 No. 57 「男らしさのゆくえ」  
思想の科学社 1985年1月 640円  
性役割としての男らしさ、志賀直哉「暗夜行路」を読む  
——駒尺喜美、性科学から男らしさを考える。

7353 思想の科学 No. 58 「<十代>の世界像」  
思想の科学社 1985年2月 680円

7354 岩波ブックレット No. 40 「単身赴任」  
平松 斉 岩波書店 1985年1月 250円

7355 現代思想 1 「特集 フェミニズム以後 女性原  
理を超えて」 青土社 1985年1月 880円  
J・クリステヴァ、J・ギャロップ、上野千鶴子他  
論文多数。

7356 「菅野須賀子全集 全3巻」 清水卯之助編  
弘隆社 1984年11月 揃定価20000円(分売不可)  
大逆事件の犠牲者・菅野須賀子の著作



—連載— 訪問ウィメンズブックス②

「近代日本看護史」の

亀山 美知子 さん

第4回山川菊栄賞を昨年暮れにお受けになった亀山さんを、勤務先の京都市立看護短期大学の研究室にお訪ねしました。今回の受賞の対象となった著書は「I日本赤十字社と看護婦」と「II戦争と看護」。

「これと買って読んで本にドメス出版のが多く、なんていい本を出す出版社だろう、と思っていた私は、看護系の雑誌に連載された原稿を持って、あこがれのドメス出版の門を叩きました。」亀山さんと同年代の編集者の共感を得て出版の運びとなり、それに今回の受賞とうれしいニュース。

亀山さんは、精神科で看護婦として八年間の臨床経験のち、1975年より教員の現職にある。「現場をよくしようと思っても病院ではせいぜい一病棟にとどまってしまうでしょう。むしろ新たな人たちに関わった方が、長い眼でみればよく働けるのではないかと思ったわけです」と後進の指導、執筆活動に意欲的だ。日本女性学会会員でもある。

本書は従来職業史ではない。ジェンダー論をとり入れた女性学的視点を試みた女性史としての職業史。「自分でも、くどいなと思うぐらい女性学的視点が入ってしまっ」と語る。「看護婦自身、看護史を知らない面もあるのです。教科の中に看護史も含まれているのですが、問題意識が今ひとつで、私のものとは視点が違うのです。」特に今、執筆中の「IV看護婦と医師」が一番やっかいなテーマとのこと。

「看護学は医学の亜流ではないのです。医師に言われたからこうしましたではなく、職業人として、プライドをもってほしい。明治二十年代のキリスト教系の女性の間では、看護婦は花形職業として地位が高かった。そのあとなし崩し的に低くなってしまった。男性医師たちがハイエラキーを築いていく中で、男尊女卑観を一番身近な女性——看護婦に押しつけていった。極端に言えば、看護婦は同情深くてやさしければいいと。欧米から入ってきた当初の看護学とは、似て非なる看護教育がされるようになってしまった。」「それでは同一資格の間では何が起こったか？IVでは女医の問題にも触れたいと思っています。むずかしくてね。」と抱負を語る。

本書の巻末には膨大な参考文献・資料がある。「何が資料になるかわからない前人未到の分野ですから、自分で選択するよりしかたがない。埃りまみれになりながら図書館の片すみで、ゴソゴソしたり。一しめに縛ってポイと置いてあった古いものがあとで貴重な資料になったりして、大変ですよ。」と執筆の苦労話も楽しそうな亀山さん。

「この看護史は戦前までだけにとどめましたが、性別役割分担のつけが今、まわってきているでしょう？特に老人問題と介護の問題などに」と話題はつきなかつた。

I 日本赤十字社と看護婦〔1247〕3800円、II 戦争と看護 3500円〔1260〕、III 宗教と看護 近刊、IV 看護婦と医師 近刊、②ドメス出版より刊行 (明)

お願い

シンボルマーク 募集

ウィメンズブックストアのシンボルマークを会員の皆様から募ります。一目でわかる記号論的ナウいデザインを求めます。採用させていただいた方には図書券を贈呈いたします。

締め切り 1985年4月末日 シンボルマーク係まで

女のネットワーク情報を！

女性問題を中心とした女のグループ、研究会、ミニコミ誌などの情報をお寄せ下さい。ネットワーキングのお手伝いをしたいと思います。

- 名称 ○連絡先 ○活動内容・状況
- 会報誌 etc.をお知らせ下さい。ネットワーク係まで

!! 3月25日発売!! ウィメンズブックストア 松香堂刊

BRINGING UP GIRLS  
KEIKO HIGUCHI  
TRANSLATED BY AKIKO TOMII

樋口 恵子 著・富井 明子 訳  
「女の子の育て方」英語版

日本の子育ての現状から女性論へと楽しい語りて展開します。(本号2頁に紹介)

訳も平易で親しめるものになっています。

英語テキストには是非お役立てください。外国の方にもご紹介頂けると幸いです。

## 《あなたの情報・私の情報》

## 再燃するアメリカの中絶問題

渡辺和子

今、アメリカで再び生命（中絶反対）派と選択（中絶）派の対立が激しくなっている。1月初め NOW 代表者ジュニア・ブラウンに会って NOW が直面している最も緊急で重大な問題は何かと尋ねたときも、即座に中絶の問題だという答がかえってきた。生命派の運動がテロ化し、中絶手術を行うクリニックを爆破するという実行行使がパニックを引きおこしているようである。

1月14日付のニューズウィーク誌国内版はこの期をとらえ、表紙とトップ記事で中絶問題を医学・宗教・政治・社会の面から扱い、生命派が増えていることを報じている。生命派の女性は伝統的性役割を守り、家庭の外に仕事を持たない、母性を抛り所にする女性たち。一方、選択派は高い教育を受け、家庭の外に自らのアイデンティティを求める女性たちである。中絶法をめぐる問題が女性たちを分断しているという事実である。

京都国際婦人クラブのメンバーがニューズウィーク誌から許可をえて、この記事を翻訳し、パンフとして作成。興味のある方は下記にご連絡下さい。

(400円 千170円)

606 京都市左京区浄土寺真如町1の21

渡辺和子 (075)771-4569

又はウィメンズブックストア松香堂まで。

## 職業選択に男女差はあるの？

西 佐 織

私は、施設保母になることが希望で保育科幼教をめざしていました。ある施設へ受験前に、どんな大学が適するのか聞きに行きましたところ、保母資格さえもっていればよいと言われました。なぜなら女性は結婚でやめてもらうからだそうです。おむつ洗い、食事の世話とどこへいっても女性は家事と似たような仕事しか与えられていませんでした。女であることがなぜ差別を受けるのでしょうか。人間という目で見ると、なぜ、私たちは“女”としてみられるのでしょうか。

私の大学は社会福祉系だけに、活躍している人は多いのですが、また、一方では、社会福祉でありながら、生まれた時から男と女には能力の差があると答える女性さえいます。女性から、そんなコトバを聞くと、はらが立ってしかたがありません。

そんなときウィメンズブックストアを新聞で知り、会員になりたいと思ったのです。

(下宿先  
千842 佐賀県神埼郡神埼町鶴田 福島方)

## 詩集

「ひるがえる海風のマントのふれりゅうど」  
について

潮見純子

<思秋期>などと男性側から随分と興味本位に語られましたけれど、これからの電子社会はロボットの登場で、男たちも思秋期妻と同じ孤独を生きなければならないでしょう。

この詩集は、男たちよりも一足早く孤独地獄から這い上った女の本音を詩った詩集です。

働き口も趣味もなく、孤独感だけひと一倍という何とも厄介な留守番ミセスでした。

その激しい孤独の渦の中から救い出してくれたのは、他でもない四十年余りも記憶の表面から消えていた、幼い日々の愛でした。

孤独になるとひとりだけで招魂のように、この世にない人たちにまで語りかけてしまうのでしょうか。いつの間にか会話体の詩集ができてしまいました。

四十年前の庶民の暮しの匂いや、子供の遊び、物売りの声、大太平洋戦争の末帰環者の声など、詩集を開くと過去の命が甦ってくるんです。孤独は大切にしていると素敵に光ってくるものなんです。

連絡先

千473 豊田市高美町4の39 加藤方

(☎0565-52-0393)

## 友の会事務局からのお願い

ウィメンズブックストアの  
営業時間が変わりました。

月～金 10:00 am～5:30 pm

木 10:00 am～2:00 pm

第一土曜日のみ

12:00 am～5:00 pm

通常の土曜・日曜・祝日は休み

遠方からお越しの方はお電話にてお問合せ下さい。  
日時のご相談にも応じています。

会費未納の方はできるだけ早くお振込みください。

(未納の方には振替用紙の裏の通信欄に金額を記入させて頂いております) 一年分1500円です。  
なお住所変更の方は至急お知らせ下さい。会費請求とご入金が行き違いになった場合はご容赦ください。  
(美)

## ミニコミの女たち

## 第11回

## 〈女性空間〉

日仏女性資料センターの

寺田 恕子

## 自己紹介

1942年生まれ。長年フランス語教師をやり、仏文研究者のはしくれに名を連らねながら、腰が据わらなかったのに、ここに来て女の問題に視点が定まり、静かな喜びのうちに後半生にスタートを切っているところ。2児（7歳・6歳）の母。夫の転勤でこの4月から再渡仏。老後は気の合った女の仲間と、小さな共同体を作って暮らすのが夢。



設立の動機は、きわめて個人的なものでした。フランス滞在中、女の問題に目覚め、長年やってきたフランス語を生かす対象がやっと見つかった思いで帰国。横のつながりを作ろうと、難民問題の研究者林瑞枝さん、雑誌「わいふ」主宰者の田中喜美子さん、フランス大使館資料室勤務の草場安子さん、日仏学院講師のマダム・ロッシュに声をかけ、話し合ううちに、組織の骨子が固まってきたのです。

一 フェミニズムへの信念を共通の基盤としながら、直接社会的行動を起こす運動体としてでなく、フランスの女性問題に関する資料、情報の収集、保存、研究、活用、普及に活動の主眼を置くこと、これが私たちの引き出した結論でした。女性問題研究に国際的な視点が必要な現在、フランスに関する専門機関を作ろうというわけです。

フランスと女性問題という2項を共通関心とする人たちがどこまで集まるかしらと懸念しつつ呼びかけを行ったところ、意外に大きな反響があり、設立2年後の現在170名近くの会員が集まっています。(過半数が関東近圏、残りは全国各地、男性少数、 $\frac{1}{2}$ がジャーナリズム関係、教職など有職者、 $\frac{1}{2}$ が主婦)

本格的な資料センター設立には時間も費用もかかるため、その準備と平行して、できることからやってゆこうということになり、現在までのところ全体的な活動としては定例研究会(2カ月毎)、会員の研究発表誌「女性空間」の発行(年1回)、会員交流とフランス女性情報伝達を兼ねた「センター通信」(年3~4回)の発行、その他グループ方式の活動として、A.F.I.グループ(フランスの女性情報エージェントに定期的に日本の女性情報を送る)、Ed. des Femmesグループ(同名のフランスのフェミニスト出版社の依頼で、日本の女性状況を総合的に紹介する本を執筆するグループ。作業はほぼ終了し、今秋フランスで出版予定)、横浜翻訳グループ(横浜市の委託で、フランスの老人施策・保育行政・婦人施策に関する行政資料を翻訳する。この作業も終了し、翻

訳は「フランスの家族・福祉政策」と題され出版、現在希望者に配布中)、資料グループ(英文で出された日本女性に関する政府資料をフランス語に翻訳し、フランスの交流団体に送付)、その他各種研究会として「フランス労働法研究会」、「フェミニズム研究会」、「母子関係研究会」(日仏の母子関係に関するアンケート準備中)が5~6人の有志で行われています。

このほかフランスの女性問題専門家来日の折りには、民間サイドの受け入れにあたり、これまでジャーナリスト、作家など多くの来日フランス人に、日本紹介の窓口になったり、講演会を開催したりしました。また、現在いくつかのフランスの女性団体と情報交換を通じて交流しています。在日フランス人女性との交流も少しずつ始まっており、女性問題を通じた日仏の架け橋に、という目標は、少しずつ実現されているように思います。

活動が東京を中心としているため、地方の会員に参加の機会がないという悩みも、最近関西支部ができたことで一部解決されました。(責任者: 国領苑子さん)。

設立以来2年を経て、ようやく組織の陣容と方向が定まってきたところですが、現在間借りの3室間に山積みされている資料をもっと充実すること、そして資料室と事務室を兼ねた「私たちの空間」を確保することが、目下の悲願です。

日仏女性資料センターの連絡先は、寺田の渡仏  
にともない、3月から下記に変更

## 新事務局

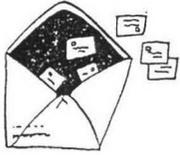
〒253 茅ヶ崎市赤松町3-29

中嶋 公子方

☎ 0467-52-5766

—— オーストラリア通信 ——

留学生のみた  
Non-Sexist Education



揮 郷 万 里

私は文部省海外派遣学生として、今オーストラリアの首都キャンベラにあるオーストラリア国立大学で学んでいます。帰国後は、女性問題を教育の面から研究していきたいと考えています。

オーストラリア国立大学の教育学部の中で、Women's Study, Feminist Movement がどのようにとり入れられているかと申しますと、教科書の中での性差別、教師の意識的、無意識的な男・女への違う対処の仕方、そのような教師の態度や教科書によって、いかに女の子が作られていくか、女の子が決まった型にはめられていくか、それが女の子の将来への選択、決定にまで大きく影響していくかということが、講義では述べられます。「sex-

ism を教育からなくしていこう！」という運動は、かなり大きく着実なように思います。

先日、小学校を訪問した時も、“Non-Sexist Education!” というポスターが入口近い所に貼られていましたし、キャンベラの教育委員会の中から“Non-Sexist Education”をめざして、“Non-Sexist Textbook”などが出版されているようです。一般の人々はまだまだ保守的で男女平等への道は遠いようですが、私がすばらしいと思ったのは、次の世代を育てていく教育の現場で「男女差をなくそう、同じように教え、育てていこう」という動きがあり、かつ教員養成の大学でも必修の授業の中で、sexism について教えているということです。

日本の大学でも、せめて教育学部の中のたとえ数時間の講義の中でも、そういったことをとり入れられるようになっていかなければと思います。 (キャンベラ発)



(揮郷さんは1月に帰国され、現在岡山大学教育学部在学中)

【品切・絶版・価格改訂のお知らせ】

0617 雑誌「思想の科学342 女性学入門」 絶版

- 0024 「働く婦人の初めてのお産」 長橋千代  
ささら書店 絶版
- 0294 「あの人は帰ってこなかった」 菊地敬一  
岩波新書 品切
- 0451 「女性解放の思想と行動 戦後篇」 田中寿美子  
時事通信社 品切
- 0462 「誰れのために子どもを産むか」 青木やよひ  
風濤社 品切
- 0463 「女性の老後計画」 吉田美津子  
日本経済新聞社 絶版
- 0643 「講座おんな——おんなの性」 筑摩書房 絶版
- 0821-0826 「ドキュメント女の百年」 平凡社 絶版
- 1187 「大興安嶺死の800キロ」 吉田和子  
新潮社 絶版
- 2063 「現代女子教育批判」 一番ヶ瀬康子  
明治図書 絶版
- 2090 「子守唄はなぜ哀しいか——近代日本の母像」  
講談社 絶版
- 3000 「専門職の女性たち」 岡田政子他  
亜紀書房 品切
- 7316 「高群逸枝全集 全10巻」 理論社 揃価 30000円  
は揃価48000円に改訂 各巻4800円に  
(価格改訂のお知らせが遅れ、ご迷惑をかけた。)

【ミニコミの品切絶版訂正のお知らせ】

- 5140~5151 「高群逸枝雑誌」各号 絶版
- 5328 「家事労働」 日本女性学研究会 絶版
- 5366 「月刊あこら89号 350円(誤)→増刊「均等平等、保護」1600円(正)

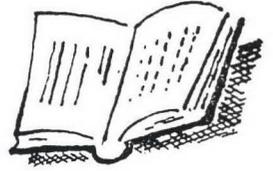
【13号の訂正】

- (最新刊案内 p.7~p.11)
- 1260 「近代日本看護史Ⅱ——戦争と看護」  
3800円→3500円
  - 0741 「ウェンディ ジレンマ」 出版社は祥伝社
  - 2182 「ふたごのお母さんがんばって」 出版社は主婦の友社
  - 7346 「銃後史ノート No.9」→No.6の誤り
  - 9015 「ストウ夫人の肖像」→9026 書籍番号の訂正
  - 9016 「もえる日々」→9027 //
  - 9017 「貞奴 炎の生涯」→9028 //
  - 9018 「母と私 九津見房子との日々」→9029 //

## 二 書 評 二

## 「子どもからの自立

—おとなの女が学ぶということ」 [2058]



伊藤 雅子 著

未 来 社

1966年、長女一歳のころ私は高群女性史と出会い、「出産は私事ではない」との一言に目からウロコの落ちる思いがした。とはいっても現実には、専業主婦として幼児をかかえこみ、家に閉じこめられて身動きひとつままならぬ生活。働くべきを信念としながら、それができないならせめて学習をと手探りしたが、そのころの婦人学級はほとんど子どもの手の離れた母親が行くものと決まっていた。その後「子供を預け、学生時代に返って勉強しましょう」と呼びかけ、子供の本やストーリー・テリングをテーマとする婦人学級をつくったが、80人の母親から50人の子供の保育を申し込まれるという事態に直面。行政の援助は年間数万円のみという自主運営の婦人学級だったから、これはもう大変なことだった。ともかく、毎回十数人の保母役と2つの保育場所の確保。自分は学習の場に出られず、保母役にまわることもたびたびだった。

このてんやわんやに突入する直前に、本書のもとになった「母と子の自立への拠点に——公民館保育室の意味するもの」を読めたのは本当に幸せだったと思う。子どもが小さい間は女は子育てに専念すべきという思いこみに挑戦し、子育て中の母親の学習権を保障するものと位置づけられた公民館保育室。いま自分がかかわる保育もそれにつながると納得して、年間14回の学習を続けることができたのである。

「子どもを生み、育て、心身ともに子どもに縛られている一番大変な時期であっても、否、その時期の真っ只中にいるからこそ女は、社会的存在としての自分を執念深く確保しておかねばならないし、自分自身を外へ外へつき飛ばすほどにしておかなければ危ないことになる、一生を棒にふる、という気がしてならないのです」(P83)という伊藤さんの警告が子育てをするすべての女の(また男の)胸に届いて欲しい。

「なにかをしたいのです。でも子どもがいるから……でもなにかを」(P79)という堂々めぐり。そこを一步踏み出す行動に出られぬまま「だんだん活力が萎えていく」女たちは今も多いのではないだろうか。(片岡 陽子)

上記の書評欄へ投稿をお待ちしています。

女性目で見直した鋭い批評や、視点を変えたユニークなものをお寄せください。

400字詰原稿用紙に約1枚半、600字前後です。住所とお名前、電話番号も原稿用紙にお書き添えください。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」。あなたの主張、伝えたいこと、知って欲しい本、御意見等に御利用ください。400字以内。住所とお名前、電話番号を原稿用紙にお忘れなく。但しこの欄は申しわけありませんが薄々謝も差し上げられませんので念のため。上記両方とも次号の締切は1985年4月末日。

宛先は 602 京都市上京区下立売通西洞院西入 松香堂書店「ウィメンズ ブックス係」です。

## 編集室から

◎特集目録子育ては、女性の生き方を軸に、子どもの問題について書かれた本を中心に、ご紹介しました。学校問題は最少限度にとどめました。

◎海外から会員になりたいとのうれしいおたよりが何通も届き、ウィーン、オタワ、ニューヨークなどに会員が広がっていきます。海外からの情報は資料室に保存しています。ご利用下さい。

◎次号は世界の女性たちと題して海外の女性問題を特集します。アジア・アフリカの情報を編集室までお寄せ下さい。6月発行予定です。(木下)

◎この会報は入会お申し込み頂いた方のみ発送しています。会費未納の方お早くお振込み下さいませ。なおご継続なさらない方はすぐにお知らせ下さい。住所変更の方もご一報を。

◎このウィメンズブックス誌も嬉しいことに各方面から注目されるようになりました。皆様のご声援のおかげです。今年第一号お届けします。(中西)